

# 槐

かい

同井省二創刊

平成25年7月号

平成二十五年七月一日発行 第二十三巻第七号 編集費二天五号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



# 未完の円

高橋将夫

言 靈 に 玉 虫 つ い て を り に け り  
夏 の 蝶 言 葉 の 綾 に か ら ま り ぬ  
繭 の 中 に 入 れ ば 気 に な る 外 の こ と  
な め く じ り 家 は 前 世 に 置 い て き し

揚羽蝶 宇宙の闇に染まりたる  
掛けるより抱へ込まれる夏蒲団  
品のよき人ばかりなり 菖蒲園  
菖蒲湯の菖蒲を吸へばキユンと泣く  
風鈴の音は錬金術のごと  
炎帝の閲兵式や 兵馬俑  
夏の虹 いつも未完の円のま

# 塊賞受賞作品二十句

寺田すず江

あした葉のさらりと過去を置いてきし  
蒼穹でなければならぬ曼珠沙華  
思はねば何も見えざり海鼠囁む  
逃水に昭和の影を追ふてゐる  
鷹渡る無心に大河流れけり  
しやぼん玉自由に飛べと言はれても  
失ひし刻を追ひたり遠花火  
点と線孤独なりけり吾亦紅  
雁渡る名残の空の一行詩  
少年の自我に目覚めし寒牡丹

凍らねば神にはなれぬ夜の滴  
美しき畏めぐらせて蜘蛛の糸  
木曾三川のなかだちをして秋の虹  
黒い夢食べてしまひぬ猯枕  
狼の声と思ひし黙示録  
詩を探し冬の銀河に凭れゐる  
うつし世に従いてゆけぬと古雛  
野火を見て燃え立つもののありにけり  
水底に日の差してゐる涅槃かな  
燃えつきし生命たふとし養花天

# 槐安集

水野恒彦

青葉木菟月昇る夜に鳴き止みて  
今生の刻つかひきる浮いて来い  
善開題き人の藜の杖と鞍馬越え  
桐の花咲くと見たるに今冥し  
法楽の夕べはねむる合飲の花

延広禎一

青葉木菟古道に五輪のしるべ石  
ねずみ木戸くぐれば奈落七変化  
松林の濡れをくぐりて盂蘭盆会  
高札場に火蛾舞うてをる夜明けかな  
土用寄席笑ひの壺を抱きぬて

加藤みき

緑蔭や遠来の人間近にす  
歩留りも按配もよし梅を干す  
羊蹄の花のぼりゆく湖の風  
梅の実の全き青を寿げり  
汗をかき天神の道通りやんせ

石脇みはる

杜若夜風にしめりありにけり  
麦秋や畚の中に赤ややく子こゐる  
からたちの垣にあづけし夏帽子  
ばばさまはいつもだんだん夏祭  
炎天を来て大樟の影だんだんあかがらうといふ高松の里でしては祭に入る



中島陽華

虞美人草笑ひ散つたる般若かな  
芋けんぴ囓む音しきり花は葉に  
書家の縁目玉もある蛇の衣  
卓袱台に空の大鍋鎮花祭  
春雷や産衣袱紗を手にしたる

竹内悦子

日暮まで坐りて蓮の浮葉かな  
松にみて万福寺に蝶生れけり  
味見して醬買ひをる立夏かな  
恐山八重の櫻と薬師の湯  
烏柄杓一つ舌出す鬼門かな

雨村敏子

海 朧 花 朧 なり 一切 経  
迦陵頻伽椿の花のまつ盛り  
宝塔をぬけ陽炎のみちに入る  
ばあちゃんに魔女五段なり亀鳴ける  
新緑や防災学舎も寧楽みちも

本多俊子

楠若葉湧き立ついのち響みくる  
若楓ときめくものありにけり  
謡ひ終へし紅潮の頬浮いて来い  
放心のうしろかがやく蜥蜴かな  
ふらここの二つに残る水たまり

近藤喜子

旭東本館刊  
朝寝してそれきり眼ひらきてよ  
葉桜や足取り軽く次の世に  
菜畑のまるでソドムよ根切虫  
樟若葉さ揺らぎ神の息づかひ  
青葉木菟わが家は星の森となる

谷村幸子

うかうかと山を見てをり更衣  
仏頭の頬を撫でをる今年竹  
いさかひし後の新茶になごみけり  
子が走り子が追ひかける新樹光  
亡き友の笑顔がいまも蓮の風

瀬川公馨

シークレットヒールを履いた雲の峰  
炎天へ抜き手を切るやアスファルト  
万緑の中や時間の破れあり  
うす塩の浅蜷なかなか口割らぬ  
夏草や萱ねずみらのハネムーン

久保東海司

何か言ひ交して蟻のすれ違ふ  
篝火に鵜縄のほつれほぐしやる  
隣り合ふ矢車同志しやべり出す  
囀りや無口の男うとまれて  
スカートトの襷の直線更衣

中野京子

生きるとは花咲く力散る力  
花は葉に時をこぼしてしまひけり  
朝靄をゆらしてゆけり聖五月  
踊り子草まはる土より茶碗生れ  
おほどかな白寿ま赤なアマリリス

柳川 晋

突き抜ける錐の穂先や夏に入る  
初夏や軽く明けゆく浪速の夜  
人間に見られて虹は色を産み  
練習も仕直しもなし蛇の衣  
サングラスしてロツカーは白髪染め

岩下芳子

代代の紋を受け継ぐてんとむし  
天空は大風地上五月晴  
泰山木咲き高らかにコンチエルト  
春蟬や極彩色の勅使門  
夏浅き出雲の杜の夜の神事

近藤紀子

柿若葉生きよ生きよとさやぎける  
木下闇抜けて日を浴ぶ安堵かな  
お炊きやす淡竹と豆は出合ひもん  
青梅落つ音を捕へし犬の耳  
余花の雨陸軍用地の碑を隠す



# 槐市集

中道愛子

どうどうと足ふんばつて武者人形  
夏つばめ少年の列真直ぐに  
炊きたての筍ごはんをおすそわけ  
大輪の牡丹育ててをりにけり  
ふたたたびの光悦垣と松の花

中山とし子

朝風の注連新しき二見浦  
首塚の九鬼水軍や郁子の花  
つばくろや浜の嫁御のバイク駆る  
茂り中つがひの鳥と目の合ひぬ  
神島や口いつぱいの浅蜷飯

橋本正二

夏色に染まりし乳房静かなり  
爪切りし指ひろげみる半夏生  
風薫る四つ辻に佇つプラトップ  
夏めきてアンネの薔薇は蕾かな  
堰落ちる水の輝き立夏かな

橋本順子

しなやかにアーチくぐりぬ新樹雨  
鬼蓮に乗る子さらはれさうに見ゆ  
若鮎や光の帯の通り過ぐ  
はみ出たるキャベツのみどりカツサンド  
目薬の苦き味する聖五月



# 槐集

## 高橋将夫選

奥の院神うとうとと赤棟蛇 岡崎 後藤マツエ

青葉木菟恋の行方は闇が知る  
尼逝きて泰山木の匂ひをり

白菖蒲揺れて水面に蝶描く

浜万年青沖より澄みし空の色

風あらば蓮の浮葉に乗りて来よ

今そこに御座すと思ふ青簾

こころざしいつも青年紅の花

桐咲いて気高き空になりにけり

蟻の列千のたましひ日を浴びて

堰切つて蒼天展げゆく田水

第一声を考へてゐる羽化の蟬

風やんで背骨のほしき鯉幟

木洩れ日をリズムとしたる踊子草

夏帯をきりりと締めて粹な嘘

岩月優美子

枚方 熊川 暁子

蚊を追へば小満の月赤かりし 寝屋川 山根 征子

うたかたの忘れな草に触れてみし  
蓮植うるここを浄土と蛹浮く

薬草に五月の庭は闇白し

まだ上に遊ぶつもりの鯉のぼり

葉桜や赤き実隠す闇ありぬ 大阪 江島 照美

北斎のベルリンブルー春怒濤

屁理屈をこねる幼や浮いてこい

端午の日親分肌の娘かな

躰糸つけしままなり花衣

竹皮を脱ぎ少年のこころざし 岡崎 寺田すず江

幾つまで生きていやうか豌豆むく

雨蛙あたり憚ることもなく

責葉木菟明日を見むとて鳴きにけり

神木に気をいただきぬ赤棟蛇

# 銀河往来 高橋将夫

## ◇「槐集」 観照

青葉木菟恋の行方は闇が知る 後藤マツエ  
青葉木菟に聞いたところによると、「恋の行方は闇が知つて  
いる」とのこと。そもそも「恋は盲目」という。恋の本質に迫  
る一句。〈屁逝きて泰山木の匂ひをり〉は深みがある。〈奥の院  
神うとうとと赤棟蛇〉には諧諷味がある。〈白菖蒲揺れて水面  
に蝶描く〉と〈浜万年青沖より澄みし空の色〉には作者ならで  
はの視点がある。美しい。

風あらば蓮の浮葉に乗りて来よ 岩月優美子  
「悼大鳥翠木様」との前書きがある。「蓮の浮葉に乗りて来よ」  
の措辞に翠木氏への思いがこめられている。〈桐咲いて気高き  
空となりにけり〉〈蟻の列千のたましひ日を浴びて〉からも作  
者の精神のあり様がよく伝わってくる。

堰切つて蒼天展げゆく 田水 熊川 暁子  
田に引く水が堰を切つて流れ込み、一面に広がつてゆく景。  
「蒼天展げゆく」の捉え方は作者ならではのもの。〈風やんで背  
骨のほしき鯉幟〉〈夏帯をきりりと締めて粹な嘘〉〈第一声を考  
へてゐる羽化の蟬〉からも作者の精神の位相が見えてくる。

まだ上に遊ぶつもりの鯉のぼり 山根 征子  
風にはためく鯉幟を、「まだ上に遊ぶつもり」と捉えた。鯉  
幟の本質に迫る一句。〈うたかたの忘れな草に触れてみし〉は

抒情だが、一転して〈蚊を追へば小満の月赤かりし〉〈蓮植う  
るここを浄土と蛹浮く〉〈葉草に五月の庭は蘭白し〉の「赤い月」  
「蓮池に浮く蛹」「葉草の庭の闇」には緊張感がある。

端午の日 親分肌の娘かな 江島 照美  
五月五日は男子の節句。そこに登場するのが親分肌の娘とい  
うから恐れ入る。「セーラー服と機関銃」が思い出される。〈屁  
理屈をこねる幼や浮いてこい〉は「浮いてこい」の幹旋が抜群。  
〈北斎のベルリンブルー春怒涛〉〈葉桜や赤き実隠す闇ありぬ〉  
の色彩感覚はなかなかのもの。

幾つまで生きていやうか 豌豆むく 寺田すず江  
「人は生かされている」と悟り顔しないで、「幾つまで生きて  
いやうか」とうそづくところが、いかにも作者らしい。

棺桶にいづれなる樹も青葉噴く 有松 洋子  
いづれ棺桶になる木も青葉する。いづれ死ぬ人にも青葉若葉  
の時がある。宇宙の真理なのだ。〈蘭つむぐただただ深く眠る  
ため〉〈くちびるから立つ風のあり草の笛〉、どちらも新鮮な感  
性に溢れている。

草の戸の向かう蓮の百の色 竹中 一花  
「草の百」と「蓮の百の色」はまるで蕪村の絵を見るようだ。  
〈あいの風止むやばつくり寺の軒〉は親しみのもてる一句。

はるかより鶯の声 無言館 谷岡 尚美  
信州上田の無言館には戦場に散った画学生達の作品が展示さ  
れている。はるかな鶯の声は画学生達の声なのかもしれない。